

保育内容「表現」における学生の意識変化を促す試み

—新聞紙遊びの実践を通して—

A study on changing students' awareness in "Expression" of Childcare Contents

— via "Playing with Newspapers"—

南谷 悠子

Yuko Nanya

〈摘要〉

本稿は、保育内容演習「表現」Ⅰ第1回目の授業において、筆者が新聞紙遊びを提案し、学生の素材に対する気づきや保育への期待がみられるのかについて明らかにすることを目的として行い、受講後のふり返しシートを分析、考察したものである。ふり返しシートは、新聞紙遊びの実践に対してどのような気づきが得られるのか、興味関心の所在と傾向を知るために自由記述で求めたところ、「新聞紙の素材としてのよさや面白さ」に対する気づきが最も多くみられた。また、「多様性」に対する気づき、「協働性」に対する気づきもみられた上、「保育への期待」を示す内容も多くみられた。新聞紙遊びの実践を通して、新聞紙に対する固定観念からの解放を味わう経験は、「保育への期待」を喚起し、新たな「音」への視座を提供できたと考えられた。今後の課題として、主体的・対話的で深い学びが実現するような授業計画を立て実践していく必要がある。何回か授業を連続させることで、「創造的な音遊び」から「創造的な音楽遊び」へと発展させながら学びを深化させ、学生の保育者視点を高めるための足がかりとしていきたい。

〈キーワード〉 保育内容 表現 音 音遊び 新聞紙

I. 研究の背景

筆者は保育者養成校において、「保育内容演習（表現）」や「音楽表現」等を担当している。「音楽表現」では、学生にピアノによる弾き歌いの指導を行っているが、学生から「間違える」「ミスをしない」といった言葉をしばしば聞く。何について間違えるととらえているのかを聞くと、大抵「音を間違えない」という答えが返ってくる。ここに「間違える=音を間違える（外す）」という学生の音楽に対する意識をみることができる。そして、

よくありがちであるのが、「音を間違える→止まる」という構図である。音を間違えて止まってしまうことで、子どもの歌いたい気持ちを萎ませることのないよう、表現や音楽の本質とは何であるかを伝えていく必要がある。また、歌うことや楽器を演奏することだけが音楽表現ではない、ということも知らせていく必要があるだろう。

保育内容「表現」と新聞紙遊びのかかわりを、保育所保育指針の保育内容から概観する。乳児保育に関わるねらい及び内容において、ウ 身近なものと関わり感性が育つ 「(イ) 内容②生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする」とある¹⁾。1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容においては、オ 表現 「(イ) 内容①水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ」「内容③生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ」とある²⁾。また、3歳以上児の保育に関するねらい及び内容において、オ 表現 「(イ) 内容①生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ」「内容⑤いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」とある³⁾。ここでは、直接的に新聞紙とかかわる内容の項目を挙げるのみにとどめたが、幼児教育・保育においては様々な感覚面を育む必要があるということがわかる。それは、五感であり、音楽的な側面からみると、音楽的な感覚（音感、テンポ感、リズム感等）であることとらえることができる。「音楽」という文言は保育内容にももちろん入っているが、ここでは「音」という文言が明記されていることに着目したい。

新聞紙遊びの実践については、造形遊びや運動遊びについての研究がみられるが、音の視点に立った研究はあまりみられない。その中で、関口（2009）は、新聞紙遊びから音遊びや音と造形遊びにつなげる実践において、音の教材化を試みている⁴⁾。清水（2012）は、新聞紙による音探しから合奏を行った実践において、学生の音への気づきや遊びとしてのイメージの広がりについて論じている⁵⁾。また、清水（2013）は、新聞紙をふくんだ身近な生活素材を用いた音探しの実践から、学生が子どもの遊びや表現活動そのものを幅広くとらえことができ、発想の柔軟さや視点の広がりへのつながりを報告している⁶⁾。関連研究では、身近な素材を用いた音づくりについて、持田（2019）が、学生の多様な音の気づきについて言及し、身近な素材と身体を通してかかわることの重要性を論じている⁷⁾。そして、横山（2019）は、身近な素材による音遊びの授業実践記録から、学習者視点よりも保育者視点の気づきが多様であることを述べ、子どもの遊びを通じた音楽表現にかかわる学生の気づきを促す要因について考察を行っている⁸⁾。

前述したように、保育所保育指針の3歳以上児の保育内容 オ 表現には、「(イ) 内容⑤ いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」とある³⁾。「いろいろな素材」と聞くと、造形的なイメージを持つ学生が多くいるのではないだろうか。しかし、音に着目しながら素材とかかわる経験も大切なのではないかと考えられる。大人にとっては読むモノである新聞紙を子どもはどのように扱うのだろうか。そして、保育者を志す学生にとって、新聞紙はど

うような可能性を秘めた素材であるのだろうか。

学生が新聞紙という素材とかかわり、音に着目し、手指を動かして遊びを探しながら、新聞紙に対する固定観念からの解放を味わう経験は、保育者を志す学生にとって、ひとつの素材への奥深さに気づき、新たな「音」への視座を提供できるのではないかと考える。そこで、本研究においては、筆者が新聞紙遊びを提案し、学生の素材に対する気づきや保育への期待がみられるのかについて明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象と調査時期

保育者養成校1年次後期開講科目「保育内容演習（表現）Ⅰ」（以下、「表現Ⅰ」と表記）第1回出席者41名（男性9名、女性32名）を対象とした。調査時期は2019年9月である。

2. 倫理的配慮

対象者に、研究目的とデータの利用について研究のみに使用することを説明し、同意を得た。

3. 「表現Ⅰ」第1回の授業内容

「表現Ⅰ」の授業を始めるに当たり、シラバスを説明し、目的や目標、授業計画や評価方法を伝えた。また、保育者としての自分を常に想定して授業に積極的に参加してほしいこと、子どもが感じる楽しさを自身も感じ取っていくようにしてほしいことを伝えた。

第1回の授業では新聞紙のみを扱うこととする。以下に第1回の授業内容を示す。

「新聞紙遊びの実践」

- ① 輪になってすわり、耳をすます
- ② 輪になってすわり、新聞紙をなるべく音をたてないように回す
- ③ 筆者が新聞紙で音を出し（破る、丸める等）、学生はオノマトペで応える（新聞紙の方を見ない）
- ④ グループ（4～5人）で、新聞紙を自由にさわりながら、新聞紙を使った遊びをみつけ、「○○る」と動詞で発表する（遊びをみつけるためのヒントとして、「○○る」と動詞で発表することを伝える）
- ⑤ グループ（4～5人）で、新聞紙を自由にさわりながら、新聞紙を使った一番おもしろい音を考え、発表する
- ⑥ 全員で協力して、大きな新聞紙バルーンをつくり、持って揺らしたり、くぐったり、最後は突き破って遊ぶ

⑦ 片付け

⑧ 自由記述によるふり返り

以上が「表現 I」第 1 回の授業内容である。なお、①「輪になってすわり、耳をすま
す」②「輪になってすわり、新聞紙をなるべく音をたてないように回す」は、シェーファー・
今田 (1996) の『音さがしの本ーリトル・サウンド・エデュケーションー』からのエクサ
サイズである⁹⁾。以下にエクササイズを示す。

ほんの少しのあいだ、すごく静かにすわってみよう。そして耳をすましてみよう。

ウォーミング・アップ 1 出典：R.マリー・シェーファー・今田匡彦 (1996)

『音さがしの本ーリトル・サウンド・エデュケーションー』春秋社 p.3

紙を一枚持ってきて、音をぜんぜんたてないように、その紙を部屋の中にいるみんな
でまわしてみよう。思ったよりむずかしいよ。指が紙にちょっとでもさわったとたん
に、もう音がするからね。

音のイメージを想像する 32 出典：R.マリー・シェーファー・今田匡彦 (1996)

『音さがしの本ーリトル・サウンド・エデュケーションー』春秋社 p.45

4. 調査方法

「表現 I」第 1 回受講後の学生を対象に、授業の最後にふり返りシート (A5 版) を配
布し、自由記述によるふり返りを記入させた後、その場で回収した。ふり返りを記入した
レポート用紙は、筆者が読んだ後コメントを記入し、フィードバックするために記名式で
行った。

5. 分析方法

「表現 I」第 1 回受講後の学生によるふり返りシートは、新聞紙遊びの実践に対してど
のような気づきが得られるのか、興味関心の所在と傾向を知るために自由記述で求めた。
ふり返りシートすべてに目を通し、筆者が学生の感想を一文に切片化し、事実 (〇〇を行っ
た)、授業への期待 (来週の授業も楽しみです)、筆者へのねぎらい (ありがとうございます
) を除き、カテゴリー分けを行った。また、新聞紙の素材としてのよさや面白さに対す
る気づきや、新聞紙遊びの実践から保育への期待を示す内容がみられたかを視点として分
析を行った。また、ソフトウェア「KH Coder」を用い、抽出語の出現回数一覧と共起ネッ
トワークを作成した。共起ネットワークは、描画数 60 とし、強い共起関係ほど太い線、
中心性が高いほど濃い色、また、重要な線だけを描画されるように設定した。筆者がカテ
ゴリー分けを行った表と、「KH Coder」による抽出語の出現回数一覧と共起ネットワー
クから分析、考察した。

Ⅲ. 結果と考察

学生の自由記述によるふり返りを切片化し、126の切片とした。「ポジティブな記述」が125、「ネガティブな記述」が1であった。切片のラベリングを3段階にわたって行い、5つのカテゴリーとした。ポジティブな記述のカテゴリーは、「新聞紙の素材としてのよさや面白さ」に対する気づき（表1）、「多様性」に対する気づき（表2）、「協働性」に対する気づき（表3）、「保育への期待」を示す内容（表4）とした。ネガティブな記述のカテゴリーは「困り感」を示す内容（表5）とした。次に、KH Coderによる分析から、抽出語の出現回数上位15語のリスト（表6）と共起ネットワーク（図1）を示す。

表1 ポジティブな記述：「新聞紙の素材としてのよさや面白さ」に対する気づき

記述内容
<ul style="list-style-type: none"> ・新聞紙を使って音を出して、いろんな種類の音がたくさん出て面白かった。 ・身近な新聞紙を使って、こんなにたくさん遊びが楽しめることを知って驚いた。 ・新聞紙一枚で、こんなに様々な音が出せたり、遊び方を考えたりできたのが面白かった。 ・音を出さずに新聞紙を回すのは、集中力や神経を使って面白かった。 ・広げてガムテープを貼っていくことや、いろいろな音を出すのが楽しかった。 ・新聞紙遊びでこんなにも楽しく遊べると思っていなかった。 ・新聞紙一つでいろんな事ができるんだなって思った。 ・新聞紙一つで、音遊びや切ったり、ちぎったり、たくさん遊びができて、新聞紙の多彩さを知った。 ・考え方を変えるだけでどのようにも遊ぶことができるのは魅力的だと思う。 ・新聞紙は、読むだけではなく無限の可能性を秘めている。 ・新聞紙一つだけなのに、幅広い使い方があって興味深かった。 ・普段はゴミになる新聞紙が、いろんな遊びになるなんて思わなかった。 ・大きな遊びや小さな遊び、すべてできる新聞紙はすごいと思った。 ・身近にあるものでいろいろな遊びができることがわかってよかった。 ・新聞紙の遊び方が考えてみるととてもたくさんあって、面白いと思った。 ・新聞紙をつなげて持ち上げるだけで、中が秘密基地みたいになって楽しめることを知った。 ・新聞しか使っていないのに、90分過ぎるのがとても早くて楽しかった。 ・新聞紙一つでいろいろとできることに驚いた。

* 回答数計 64 * 重複回答あり * 紙面の都合により、一部を載せている

表1「ポジティブな記述：『新聞紙の素材としてのよさや面白さ』に対する気づき」からは、新聞紙の素材としてのよさや面白さに対する気づきが多くみられた。特定の授業内容への言及もみられたが、授業全体を通しての記述が多かった。新聞紙一つでいろいろな種類の遊び方があることを知り、新聞紙でこんなにも遊べることへの意外さや驚きを読み取ることができた。また、新聞紙遊びが「楽しかった」「面白かった」等の記述の多さから、新聞紙遊びが学生にとって満足のできる内容であったことが感じ取れる。

表2 ポジティブな記述：「多様性」に対する気づき

記述内容
<ul style="list-style-type: none"> ・人によって音の聞こえ方が違うことがよくわかった。 ・新聞紙で音を出して発表するとき、それぞれ違う音が出て面白かった。 ・オノマトベも人それぞれの聞こえ方や表現の仕方があって、聞いていて楽しかった。 ・破るだけでも一人ひとり違った音のとらえ方をしている、すごいなと思った。 ・聞こえた音を擬音語で言うところで、みんな聞こえ方やとらえ方が違うこともわかった。 ・みんな面白く音をさがすときも、どのグループも同じ音がなくて、すごいなと思った。 ・新聞を破るにしても、丸めるにしても、人それぞれ音の感じ方は異なっているということを知ることができてよかった。 ・音の出し方がいろいろあり、面白かった。 ・みんな音の感じ方が違っていた。 ・人の個性がよく出ていたと思う。 ・音の一つ一つでも個人のクセや力のいれ具合で色々と変わる。 ・人によって新聞紙の遊び方が全然違っていた。 ・オノマトベでは、音一つでいろんな意見や聞こえ方があり、とても面白かった。 ・たくさんの人でやるほど違う意見が出てきて、感じ方が違うことに面白さを感じた。 ・新聞の破り方一つでも、人によっていろんな聞こえ方がある事がわかった。 ・オノマトベは、たくさんの人によって違う聞き取り方があった。

* 回答数計 16 * 重複回答あり

表3 ポジティブな記述：「協働性」に対する気づき

記述内容
<ul style="list-style-type: none"> ・1人では思いつかないことも、いろんな人がいればアイデアはいろいろ出るなと思った。 ・みんなで協力して大きい一枚の新聞紙を作り、下をくぐって遊ぶのはとてもワクワクした。 ・新聞紙をつなげて一つの紙にするときに、雑な部分もあったけどそれも含めて楽しかった。 ・一人でも楽しめるが、グループやクラスみんなでも遊べてとても楽しいと思った。 ・グループで遊んだり話したりするのが楽しかった。

* 回答数計 5

表2「ポジティブな記述：『多様性』に対する気づき」であるが、授業内容は「音」に着目させる内容ばかりではなかったものの、「音」に関する記述が多くみられた。授業内容は③④⑤にかかわるものと推察された。音の感じ方や表し方の違いについての記述が多くみられ、また、人との感じ方の違いや遊び方の違いをポジティブに受け止め、認め、面白がることができている様子を読み取ることができた。

表3「ポジティブな記述：『協働性』に対する気づき」からは、グループワークで行った活動についての記述がみられた。授業内容④⑤⑥がグループワークや全員での活動であった。グループで意見を出し合い、多くの遊びを考えたことや、話し合っ面白く音をみつける過程に、人とかかわる楽しさやよさを感じていたと考えられる。授業内容⑥の全員で遊ぶダイナミックな活動についても記述がみられた。みんなで協力して大きな新聞紙をつくる過程や、全員が参加する活動への楽しさが読み取れる。また、これらの活動から、1

人ではなく人とのかかわりがあるからこそ得られる気づきがあったと考えられる。

表4 ポジティブな記述：「保育への期待」を示す内容

記述内容
<ul style="list-style-type: none"> ・自分で触れて考えることができるので、表現が豊かになりそうと思った。 ・皆で協力して一つの大きなものを作り上げて遊んだり、音を聞き分けてオノマトベにして遊んでみたりすることは、子どもたちの感性の違いもわかり共有できるから、いいなと思った。 ・想像する力などが身につくと思うので、将来子どもに新聞紙を渡して自由に遊ばせてみたい。 ・子どもだったら、もっと違う遊び方がありそう。 ・身近なもので小さい子どもと遊べる素材なので、実践で活かしたい。 ・今日行ったような遊びを知って、保育士になったときにやりたいなって、ものすごく思った。 ・まだ他にもいろいろな遊びを見つけて、実際に遊んでみたいと思った。 ・大人が遊んでも様々な遊びがでたので、子どもが考えたらもっといろいろな遊びがでてくるのではないかと、思った。 ・子どもが新聞紙一枚で楽しめるということがわかった。 ・子どもの気持ちになれた。 ・今後、自分も教える立場になったら、今日行った新聞紙遊びをしたい。 ・子どもの気持ちになって全力で遊ぶことができた。 ・どの位の年齢でできるのか考えることができたのでよかった。 ・新聞をつなげるのは1つの部屋みたいなドームになったので、子どもからしたら特別な空間になるのではないかと、思った。 ・いつも節約して遊びたいと思った。 ・子どもの頃に遊んでいた記憶もよみがえってきて、懐かしい気持ちになって、とても楽しかった。 ・新聞の遊びがたくさん出たので、全部試して遊んでみたいと思った。 ・いろいろな物の見方ができるようになると、どんな事でも楽しく行うことができると思った。 ・今日の授業を受けて、物一つでも考え次第で楽しめるのだなと思った。 ・大人は"読む"新聞紙を使って、子どもに戻った感じになった。 ・新聞紙以外でも、身近な物で遊ぶことができることに気づいた。 ・大人と子どもでは、視点も耳の高さも違うので、その違いも認め合いたいと思う。

* 回答数計 40 * 重複回答あり * 紙面の都合により、一部を載せている

表4「ポジティブな記述：『保育への期待』を示す内容」からは、子どもへの共感や保育への期待を示す記述が多くみられた。また、子どもの感じる楽しさを感じ取りつつも、保育者になったら、という視点を読み取ることができた。これらの記述は、子ども理解や保育観形成へつながっていくものと考えられる。そして、新聞紙以外の素材でも遊べるのではないかと、という気づきや、新聞紙遊びにとどまらず、様々な事象への見方・考え方を働かせている（より高次な気づき）と考えられる記述もみられた。

表5 ネガティブな記述：「困り感」を示す内容

記述内容
<ul style="list-style-type: none"> ・表現するのはものすごく難しい事だなとも感じた。

* 回答数計 1

表5「ネガティブな記述：『困り感』を示す内容」は、表現に対する気づきについてであった。完全にネガティブな記述であるとは言いがたいが、どちらかといえばネガティブな記述であるととらえた。しかし、表現の本質をとらえており、ある種、根源的な問いである。新聞紙遊びの中で、思いやアイデアが出にくかったり、ふさわしいオノマトペがパッと出てこなかったりしたため、表すことの難しさを感じたのではないかと考えられる。

表6 出現回数上位15語

	抽出語	出現回数		抽出語	出現回数		抽出語	出現回数
1	新聞紙	71	6	子ども	27	11	遊ぶ	15
2	思う	50	7	楽しい	26	12	考える	14
3	音	36	8	たくさん	19	13	使う	14
4	遊び	33	9	一つ	17	14	表現	14
5	いろいろ	27	10	遊び方	15	15	知る	13

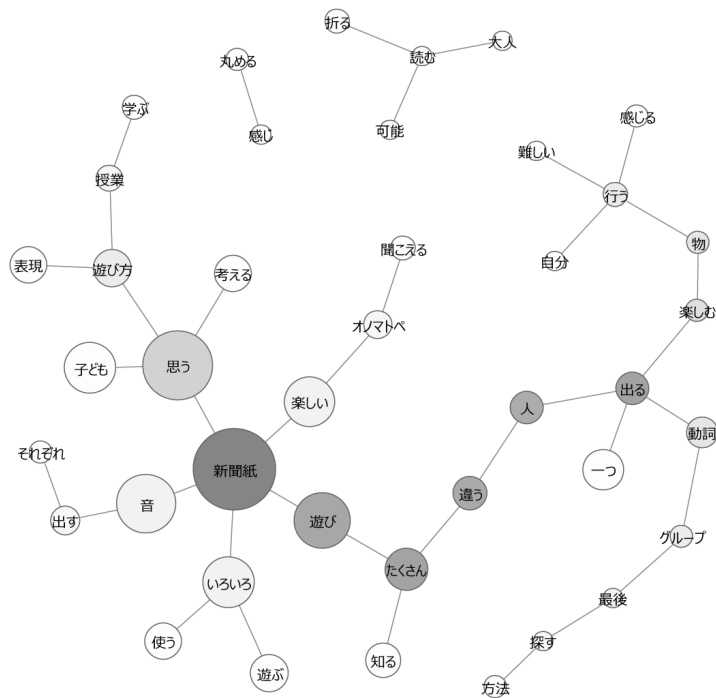


図1 共起ネットワーク

表6において、出現回数で1番多かった語は、当然ながら「新聞紙」であった。出現回数の多い語について、共起ネットワークで慎重に分析を試みた。図1の共起ネットワークから、中心性が最も高かった語は「新聞紙」であり、「音」「楽しい」「いろいろ」「遊び」と共起関係にある。「音」は「出す」「それぞれ」につながり、「いろいろ」は「使う」「遊ぶ」につながっている。また、「遊び」は「たくさん」につながっており、「新聞紙でそれ

それぞれが出す音や、新聞紙をいろいろと使って遊ぶことは楽しい」「新聞紙のたくさんの遊びは楽しい」（新聞紙の素材としてのよさや面白さに対する気づき）と解釈することができる。次に、「新聞紙」は「遊び」「たくさん」と共起関係であり、「違う」「人」につながっていることから、「新聞紙のたくさんの遊びが人と違っていたこと」への気づき（多様性に対する気づき）が推察された。そして、「新聞紙」は「思う」「遊び方」と共起関係にあり、「思う」は「子ども」「考える」につながり、「遊び方」は「表現」「授業」「学ぶ」につながっていることから、「新聞紙遊びを通して、子どもの遊び方を考えられたこと」（保育への期待）や、「子どもの遊び方を表現の授業の中で学びたい」（授業への期待）という学生の思いが推察される。

IV. まとめ

1. 総合考察

ふり返しシートの記述内容はポジティブなものがほとんどであり、記述内容の文末は「楽しかった」「面白かった」が多かった。子供の感じる楽しさを感じ取ることが、子ども理解や保育観の形成につながる土台となるのではないだろうか。井口（2018）は、「音の環境、音の出るものはすべて、幼児の音による表現の場となり、これはそれ自体、価値あるものと考えようようになってきているのである。これを受けて、環境による教育である幼児教育では、どのような環境の用意ができるのか、または、何が子どもにとって『良い』音なのかを考える必要がある」と指摘している¹⁰⁾。今回の新聞紙遊びの実践に対するふり返しからは、学生の固定観念からの解放や発想の転換を感じ取ることができた。学生が自分の気持ちのままに何らかのやり方で音を出す心地よさ、爽快感があったと考えられ、保育への期待につながっていると推察された。

「新聞紙の素材としてのよさや面白さ」に対する気づきが多く見られたことから、子どもの感じる楽しさを感じ取りながら、一つの素材でもとらえ方次第で様々な遊びの展開可能性があることへの気づきがあった。学生の実践に対する気づきや保育への期待を示す記述内容がみられたことは、学生が新聞紙を手指の感覚で実際にふれながら感じ考える活動であり、学生が学びの中心的存在であったことによるものと考えられる。また、モノ（新聞紙）や自分自身と向き合いながらグループで協働するという点において、対話的な学びであったともいえよう。

今田（2015）は、紙を回すエクササイズについて、「音を出す行為は出さない行為の反作用なのだから、音を出さないことにより、聴覚はより研ぎ澄まされることになる。無い音、沈黙をつくる、ということである」と指摘している¹¹⁾。様々な音に晒され、慌ただしく生活している現代人にとって、一度立ち止まり改めて耳を澄ませてみたり、黙って聴いてみる活動は、新鮮な体験であったと考えられる。また、シェーファー（1992）は、教

育のなかで、五感の教育ほど基本的なものではなく、それらのなかでも耳は最も重要なもののひとつであると述べている¹²⁾。今回の新聞紙遊びの実践の①「輪になってすわり、耳をすます」②「輪になってすわり、新聞紙をなるべく音をたてないように回す」活動において、「沈黙」をつくり出し、「聴覚の意識化」を促す活動から始めたことが、音への気づきに対して効果的であったのではないかと推察される。しかしながら、「音」に着目すると、今回は「創造的な音遊び」止まりであった。今後は授業において、「創造的な音遊び」から「創造的な音楽遊び」へとつなげ、「深い学び」にしていく必要がある。保育所保育指針3歳以上児の保育内容において、オ 表現 「(イ) 内容⑤いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ」の解説では、「自分なりの素材の使い方を見つける体験が創造的な活動の源泉」と明記されている¹³⁾。ここに素材遊びの意義を見出すことができ、子どもは創造的な音遊びで育った感覚が、音楽表現において必要感を伴った表現として現れると考えられる。

2. 今後の課題

中央教育審議会の答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』の(2)「高等学校教育、大学教育を通じて育むべき『生きる力』『確かな学力』の明確化」において、③確かな学力(学力の三要素を社会で自立して活動していくために必要な力という観点からとらえ直している)の中で、「(i) これからの時代に社会で生きていくために必要な、『主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度(主体性・多様性・協働性)』を養うこと」と示されている¹⁴⁾。「主体性」「多様性」や「協働性」は、確かな学力の一つであり、保育者にとって欠かすことのできない力であると考えられる。今後の課題として、これらの点を大切に、主体的・対話的で深い学びが実現するような授業計画を立て実践していく必要がある。1回の授業で完結するのではなく、何回か授業を連続させることで、「創造的な音遊び」から「創造的な音楽遊び」へと発展させながら学びを深化させ、学生の保育者視点を高めるための足がかりとしていきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型こども園教育・保育要領<原本>』(2017) チャイルド本社
- 2) 同上
- 3) 同上
- 4) 関口明子(2009)「身近な音から広がるいろいろな表現活動—音の教材化と指導法の研究—」『聖徳の教えを学ぶ技法』第4号 pp.39-50
- 5) 清水桂子(2012)「保育者養成校における身近な素材を用いた「音探し」の実践—新聞紙との対話から—」『北翔大学短期大学部研究紀要』第50号 pp.33-40
- 6) 清水桂子(2013)「身近な生活素材を用いた「音探し」の実践過程—保育者養成における多様な表現活動に配慮した授業展開—」『住まい・環境教育学会論文報告集』第10号 pp.33-44

- 7) 持田葉子 (2019) 「保育者養成における学生の音への感性を育む授業実践—身近な素材を用いた音づくりにおける学生の学び—」『聖和短期大学紀要』第5号 pp.19-26
- 8) 横山真里 (2019) 「保育内容の指導法「表現」の授業における学生の気付きを促す学習環境の構成要素—身近な素材による音遊びの授業実践記録の分析を通して—」『東海学院大学研究年報』第3号 pp.49-59
- 9) R.マリー・シェーファー・今田匡彦 (1996) 『音さがしの本—リトル・サウンド・エデュケーション—』今田匡彦訳 春秋社 p.3, p.45
- 10) 井口太 (2018) 「幼児教育における音楽的表現の指導」井口太 (編) 『最新・幼児の音楽教育—幼児教育教員・保育士養成のための音楽的表現の指導—』朝日出版社 p.18
- 11) 今田忠彦 (2015) 『哲学音楽論—音楽教育とサウンドスケーパー—』恒星社厚生閣 p.108
- 12) R.マリー・シェーファー (1992) 『サウンド・エデュケーション』鳥越けい子・若尾裕・今田忠彦訳 春秋社 p.1
- 13) 厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針解説』フレーベル館 p.273
- 14) 中央教育審議会 (2014) 『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について (答申)』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf (2019年11月16日閲覧)